

第3回 プレーパーク講座【結果報告】

日時：平成27年5月23日(土) 14:00~16:00

場所：川西市役所本庁舎7階 大会議室

出席者：50名(他市5名、コンサルタント4名)

~子どもの根っこは【遊び】で育つ~

講師：天野 秀昭氏

(大正大学人間学部人間環境学科こどもコミュニティコース特命教授)

【講座内容】

開催挨拶・講師紹介

はじめのあいさつに続き、講師の天野さんの紹介を行いました。



講演

天野さんに「子どもの根っこは【遊び】で育つ~「遊ぶ」ことの本当の意味と価値~」という題でご講演をいただきました。



意見交換・質疑等

講演を踏まえて、天野さんとの意見交換・質疑等を行いました。



【講演の内容】

プレーパークの設立

- ・今から40年前、既に子ども達は屋外よりも屋内での遊び時間が多く、3~4名の少人数で遊ぶなど、遊び環境に異変が起きていた。
- ・国際児童年である1979年、プレーパーク事業を重要視した世田谷区が、記念事業として採択したのがきっかけで、以後、官民協働で進めていった。
- ・プレーパークの創設に際し、資金と場所の確保は世田谷区が行った。
- ・日々の運営は全て住民で行うのを条件に、公園利用に関する全ての禁止事項が解除されている。

プレーパークについて

- ・プレーパークには業者が作った遊具は無く、全て手作りで、子ども達自身がいつでも遊び場を作ったり壊すことができる。
- ・プレーパークの1日を見ると、乳幼児やその親、小中学生や高校生、会社帰りの大人が立ち寄りなど、あらゆる世代が集まり、それぞれのやり方で人と関わっている。
- ・子ども達が自分達の力に応じて少しずつ成長できるように、設備も様々な高さや大きさのものを作っている。
- ・その子の能力を年齢で判断するのは危険なことで、今までどのように体を使ってきたかを重視する事が大事である。

「遊ぶ」ということ

- ・ご飯を食べないと体が死んでしまうのと同じで、遊ばないと心が死んでしまう。遊び=食べることと同じで、勉強や稽古事と比較できない。
- ・子どもの室内の遊びが増えているのは、公園での禁止事項が増えてきていることなど、大人都合で子どもの遊ぶ環境が貧しくなっているからである。
- ・やってみたいと思う気持ちが「遊び」である。
- ・強制しても遊びたい気持ちがない限り、何をやっても遊びにはならない。
- ・自らが育とうとする力、自分自身が輝ける世界をもっと深めたいと思う気持ち=遊育
- ・大人が価値を認めたもののみ子供に教え、それ以外は無視をするか禁止をする=教育
- ・都市化が進むごとに、子どもをコントロールしようとする力が強くなっており、1980年代以降、子ども達は大人に逆らえないようになっていく。
- ・子どもを何とかするのではなく、子どもの環境を何とかしてほしい。
- ・子ども達が起こす事件の背景には、「自分が生きている」という感覚を感じなくなっているためであり、他人の命の重さもわからなくなっている。
- ・遊育の教科書は本人自身であり、本人が満足すればそれが答えとなる。
- ・テレビゲームは、どれだけやっても本人の世界は広がらない。
- ・子どもは大人のやることをよく見ており、大人にとって良い子になろうとすればする程、その子自身の心が死んでしまう。

脳の働きと遊び

- ・何かをやりたい、やってみたいという気持ちは「情動」と呼ばれる。
- ・遊びに正誤は無いが、大人が正しい遊びをしると大人の世界に当てはめて子どもの行動を順序づけている。遊育に正誤は無く、あるのは面白さだけ。
- ・人の意志で動かせる筋肉は随意筋、動かせない筋肉を不随意筋と呼ぶ。
- ・体の動きを支配している自律神経や、体内に入ってきた外敵を撃退する免疫系、神経や脳内ホルモンを管理する内分泌系は、人の意志だけで動いているわけではない。
- ・遊ぶという行為は、これらの動物的感情をフルに使っている。
- ・人間は生まれてきた直後が一番脳神経が多く、その後使われない神経は死滅していく。
- ・9歳頃には脳の情動部分が完成するため、この期間内でどのように遊ぶかが重要である。



- ・現在、傷つきやすくなったり精神を病む子どもが増えているのは、この遊ぶ経験が圧倒的に不足しているからである。
- アイデンティティについて
- ・生きる力は生まれるまでに持っているものであり、育てるものではない。
- ・「やりたい」と思う気持ちはその子の命の渴望であり、奪ってはいけない。
- ・その子の軸が立っているから社会が存在しているのであって、その子が生きている感覚を感じていないのであれば、社会は成立していない。
- ・昔の記憶（長期記憶）が残るのは、繰り返し行った行為または情動が働いた時である。（登下校時に壁を触りながら歩くなど）
- ・五感は心のセンサーであり、それを使えば使うほど心は育つ。
- ・幼児期は生涯の準備期間となっている。
- ・子どもが子どもでいられる時間を大人が確保してあげなければならない。
- ・親だけの子育ては不可能で、社会に出会わせなければならない。
- 犯罪に対する安全について
- ・知らない人についていくなと言われ大人の言うことに反論しない子は、犯罪に巻き込まれやすい。誘拐被害者に多いのは、断れなさそうな子である。
- ・自分の気持ちで動いている子は、自分にとって不快なことはしないため、そもそも声を掛けられにくく、犯罪に巻き込まれにくい。
- ・誘拐の加害者の多くは、子供時代に傷つけられ同年代と上手くコミュニケーションが取れない人なので、自分が言うことを聞かせられそうで断れない子を嗅覚で選んだりする。

【意見交換・質疑等】

- Q) いいお話有難うございました。自分は8年前から子ども達を集めて田植えをしている。田んぼで泳ぎだす子どもいるが、自由にさせている。
- A) 子ども同士の関係性ができてくると、「これをやってもいいか」などの大人へのうかがいがなくなり、自分たちで解決しようとする。
- Q) 男女協働参画、IT技術向上は子どもの環境が悪化しているのではないか。
- A) IT技術はむしろ大人の方がついてきていない。子どもはリアルな関係性をしっかりしていれば、ITには屈しない。
- Q) 自分たちが子どもの頃は小動物の扱いを通して命の大切さを理解していた気がした。今は子どもに対して様々なことが禁止され、ケガをさせてはいけないようになってきている。子どもを預けたのならケガはしょうがないものだと思ってほしいが、いかがなものだろうか。
- A) 友達同士でそのようなことをするのが、大人からのエスケープである。大人にとって都合の良いまちやルールを作れば作るほど、子どもにとって生きづらいまちになっていく。見て見ぬふりをする大人の存在も大事である。子どもにとって大人の目が無い時間が減ってきている。遊んでいれば骨の1本くらいは折れる。骨はちゃんとくつつくが、子どもの心は一度折れるとなかなかくつつかない。よく遊んでいる子ほどケガをしない。
- 猫の子の実験では、自分で動かずに生活をしていた子猫は、障害物を認識しても避けきれなかった。これは障害物を認識する部位と体を動かす部位が上手く連携が取れていないためである。普段から動いている子は、自分の能力が分かっているため、危険を感知し無茶をしない。いざ何かあった時も体が動き方を獲得しているので、ケガをしない。
- Q) 中学生と小学生の子どもがいるが、中学生の子どもは「家に帰るとホッとすると」と言い、寝るまでゲームをすることがある。小学生の子どもに「外で友達と遊んでおいで」と言っても、「友達とトラブルになるから嫌だ。」と言って家にいることもある。遊育をさせてあげたいという気持ちがあるが、なかなか物理的に難しいと感じている。何か小さなことでもいいので、すぐに具体的に遊育に繋がられるようなことはないのか。
- A) 中学生くらいになると、それまでの事が背景にあるので、簡単には変わらない。親がやれることはどんどん減っていくし、親がやればやるほど変になっていくこともある。私の場合、家に色んな人を連れてきた。子どもと喋れそうな人を連れてくる。人間関係や趣味等、親の世界を自分でどう広げていくかが大事である。
- 家の中でできるものとしては「料理」が考えられる。自分自身の創意工夫が反映できる。例えば家族でカレー対決をしたり、誰かの誕生日の時に何かを作ったりと、暮らしを生み出すことが大事である。大人が消費だけではなく何かを生み出している姿を見れば、子どもも生み出すようになる。暮らしの中で自分がどういう風に生み出していかを子どもに見せられれば変わっていくのではないかと。